令和 5 年 11 月 18 日

# 学位請求論文（論文博士）審査報告書

学位請求論文：新羅都城の成立と展開

学位請求者：国立加耶文化財研究所　所長　李　恩碩

審査委員
主査　専修大学文学部　教授　　高久　健二　㊞

副査　専修大学文学部　教授　　田中　禎昭　㊞

副査　専修大学文学部　准教授　小林　孝秀　㊞

副査　東京大学　　名誉教授　早乙女　雅博　㊞
　　・放送大学　客員教授

審査委員会は、提出された本論文を問題関心、研究の先進性、論文構成の説得性、研究の到達点、考古資料収集の広さと実証性、今後の展望などを中心に審査した。また、口述試験において、直接、請求者本人に対して上記の審査観点からの質疑応答をおこない、判断材料を得た。

## １．論文の骨子と評価

本論文は、朝鮮三国時代の新羅における王宮や都市遺跡の位置問題・築造時期、寺院と王宮との関係性などを検討し、新たな視点から新羅王京の成立に対する解釈を提示したものである。また、都城民の生活と関連する道路、橋、氷庫、温石などを検討し、当時の生活状況の復元をおこなっている。

第1章では、新羅始祖の朴赫居世の生家であり、神宮跡と推定されている蘿井について、発掘調査で検出された遺構の年代と性格について再検討している。従来の見解では、発掘調査で検出された竪穴遺構、溝状遺構、木槨施設は1～6世紀の約500年間にわたって存在し、6世紀になって竪穴状遺跡が埋められ、その上に中心柱と小形礎石を使用した建物が約150年間建てられた後、八角形建物が築造されたと解釈されていた。しかし、検出された遺構と出土遺物を再検討した結果、現在の蘿井遺跡が井戸である根拠は存在せず、竪穴遺構が400～500年もの長期間にわたって存続した可能性は低いとした。さらに、現在の蘿井遺跡（八角形建物跡）は唐の制度を導入した7世紀中頃以降に祭天儀礼をおこなった南郊であったという新しい解釈を提示している。この南郊が高麗·朝鮮時代に入ってから蘿井と認識された可能性が高いとする。文献史料の記述に依拠して、考古学的成果

を解釈することの問題点をあらためて提起している点が重要である。

第2章では、新羅初期の王宮である金城と南堂の位置、および正宮である月城の築造時期について、文献史料と考古学的な発掘調査成果を総合的に分析し、検討している。まず、金城については文献史料では1～5世紀の記述が見られるが、5世紀以降は王宮としての月城の記述が本格的に登場する。北川北岸に位置する隍城洞遺跡では1～3世紀代の木棺・木槨墓と大規模な製鉄遺跡が発見されていることから、ここが新羅初期の中心地であり、金城であると推定する。また南堂については月城に存在したと推定し、488年に月城が完全に整備された以後も、その内部に南堂が残っていたとする。月城の築造時期に関する従来の見解では、敷葉工法の上でおこなわれた祭儀行為が4世紀代における築城のためのものであり、城壁から出土する土器は5世紀代中葉以降に編年されるので、長期間にわたって築城されたと解釈されていた。この見解に対し、敷葉工法については低湿地における自然堆積であると解釈し、城壁築造時の祭儀行為とされる「人身供献」については、月城築造以前の4世紀代に形成された集団墓であるとして、城壁築造とは無関係であるとみている。また、月城北側の濠の築造年代についても、放射性炭素年代測定によって5世紀前半と推定されることから、城壁は5世紀に築造され、6世紀に改修されたと解釈している。これまで不明確であった金城と南堂の位置についての解釈を提示するとともに、月城の築造時期を遡らせる従来の見解に対して問題点を提起した点が評価される。

第3章では、新羅都城の中心的な寺院である皇龍寺の築造過程と意義について検討し、新羅都城の都市計画について考察している。皇龍寺の造営について『三国史記』と『三国遺事』には真興王が新宮を建設しようとしたが、黄龍が現れたため寺院に変更したと記されている。あらためて文献史料に記録されている「龍の出現」という表現を検討した結果、慶州盆地で発生した竜巻と関連性があることを指摘した。すなわち、竜巻によって龍と王を結び付け、盆地の中央で竜巻が起こりやすい場所を予想して都市の中心となる新宮（紫宮）を計画したのではないかと解釈した。皇龍寺の位置は陰陽五行による王宮の配置とも正確に合致しており、新宮と新都市を建設するという真興王の意図がうかがえるとする。すなわち、真興王は、新宮（皇龍寺）の建設とともに、内部的には王権強化を、外部的には領土拡張を推進し、自らを転輪聖王と称して、王即仏時代を導いたと考察した。また、皇龍寺の三金堂は高句麗の清岩里廃寺や日本の飛鳥寺とは異なり、西金堂-中金堂-東金堂の順に一列に配置されている。真興王が当初は王宮を計画するなかで、北魏洛陽城の太極殿構造を取り入れたが、王宮から寺院への変更にともない、丈六尊像など19体の尊像を祀る寺院の構造に変わった。宮殿から寺院へと変化したにもかかわらず、三金堂構造が維持された理由について、東金堂は東宮の概念をもち、東輪太子のための礼拝施設として、西金堂は転輪聖王である真興王のための施設であったためであると解釈した。三金堂のうち中央の丈六尊像金堂が完工した後は、東金堂には塑造丈六尊像（あるいは薬師如来仏像）、西金堂には天賜玉帯を保管し、新羅都城において王権を象徴する最も重要な場所であったとする。文献史料の解釈と発掘調査成果の再検討にもとづいて、真興王の時期に皇龍寺を中心とする都市計画が意図されていたことを明らかにした点が高く評価される。

第4章では、これまでの発掘調査成果にもとづき、新羅都城の段階的発展の様相について考察している。真興王は王権強化と正統性の樹立を目的として都市計画を作成し、当初

は皇龍寺が存在する場所を王宮として、これを中心とする都城が計画されたとする。すなわち、子午線に合わせた南北道路を中心線として配置し、皇龍寺の中央に連結するという基本設計が作られたとする。このような配置は思想的背景と理念を反映して決められたと考えられ、その背景には当時の洛陽城あるいは建康城の概念を導入した可能性を指摘している。しかし、皇龍寺が王宮ではなく寺院になったことで、王朝儀礼の軸線としての朱雀大路は結果的に造られなかったと解釈している。従来、月城と城東洞殿廊跡をつなぐ南北の都市区画道路を朱雀大路であるとする説が有力視されていたが、これを明確に否定している。さらに、これまでの発掘調査によって検出された道路遺構に基づいて、都城における坊里制の復元を試みている。その結果、新羅都城の都市計画の特徴は、唐の長安城や日本の平城京のような全体的な総合計画として進められたのではなく、中心地から拡大していった点にあるとする。また、王宮の南側にあった廟（宗廟）は狼山の陵只塔一帯に、社（社稷）については財買井跡の南側にある平地地帯にそれぞれ比定してる。新羅都城の復元案については、これまで多くの見解が提示されてきたが、これらの説を丹念に再検討するとともに、最新の考古学的成果に基づいて新たな復元案を提示している点がとくに注目される。

第5章では、王宮である月城の周囲に造営された東宮・北宮・南宮の位置比定について新たな視点からのアプローチを試みている。まず、東宮については宮殿の東側に配置され、太子が滞在する場所であるが、これまでは雁鴨池・臨海殿がこれに比定されており、現在は月池・東宮と呼称されている。景徳王十一年（752年）に東宮が設置され、十九年（760年）に月城の西側に月淨橋が、東側に春陽橋（日精橋）が建設されたが、この春陽が東宮を意味する用語であることから、春陽橋一帯（現・国立慶州博物館付近）が東宮であったとする新たな見解を提示した。北宮については、これまで城東洞殿廊跡にあてる説が有力であったが、芬皇寺東側の九黄洞苑池遺跡を北宮に比定し、苑池や氷庫を備えた女王と関連する王宮であったと推定している。南宮については、従来、現在の国立慶州博物館付近に比定する説が出されていたが、ここは東宮に比定されるので、月城南側の仁旺洞寺跡一帯に南宮が造営されたが、のちに王室寺院に変更されたと解釈した。また、皇龍寺内の講堂北側に大型井戸が位置しているが、これまでその役割については論じられてこなかった。『三国遺事』には、皇龍寺と芬皇寺の間に龍宮が存在していることが記録されているが、この井戸が龍宮であったと推定し、周囲に建物群が配置され、祭礼空間を構成していたと解釈した。各王宮の位置について、中国における宮殿配置、文献史料、考古資料を総合的に検討し、これまでとは大きく異なる新たな見解を提示している点が重要である。

第6章では、都城に造られた一般住居建築物や道路遺構などから、都城民の生活空間の様相について考察するとともに、新羅の氷庫や温石について検討している。まず、都城民の生活空間については、中下層民は7世紀以降も竪穴住居を使用し、貴族の住居空間は4柱式・壁柱式のような地上式構造であったことを明らかにした。また、住居生活用の礎石建物は8世紀の統一新羅時代以降に出現することを指摘している。さらに貴族層は願刹として中門、回廊、講堂をともなわない構造の寺院を造営しており、富裕で豪華な家屋を意味する「金入宅」とは願刹をもった住居であると解釈している。都市基盤施設のひとつであ

る道路と橋の築造方法についても検討し、新羅の道路の特徴は、砂利を混ぜて築造する方式であることを明らかにし、さらに春陽橋と月淨橋の構造についても考察している。また、新羅都城内の氷庫は、上流階層の祭祀と関連するだけでなく、生活水準を考える上でも重要であり、6〜7世紀までは新羅地域と百済地域ではいずれも円形竪穴氷庫が使用されていたが、7世紀になると百済地域で長方形氷庫が造られるようになり、これが統一新羅時代の氷庫に影響を与えたとする。さらに、8〜10世紀には方形や六角形の石築氷庫が出現し、高麗・朝鮮時代の細長方形氷庫へと発展していったとする。温石は温めた石を布などにくるんで懐に入れて身体を温めるものであり、日本においても奈良時代以降に滑石製のものが多く使用された。統一新羅時代の都市遺跡からも扁平で楕円形の滑石製遺物が多く出土しているが、これまでは、正確な用途がわからず、錘形石製品などと報告されていた。しかし、日本出土の温石との比較によってこれらが温石であることを証明した。新羅の都城ではオンドルなどの暖房施設が発見されておらず、都城民にとって温石が重要な暖房道具であったと推定する。また、温石に用いられる滑石は統一新羅時代の滑石製品とともに唐からもたらされたものとし、船舶のバラストとして持ち込まれた交易品ではないかと推定している。これまであまり注目されてこなかった新羅都城民の生活について、百済・日本・唐との比較を通じて明らかにしている点が評価できる。

終章では、あらためて本論文の論点と結論を整理するとともに、皇南大塚南墳の年代と被葬者の比定をおこない結論を補強している。最後に「新羅は特別である」という命題や先入観に基づく従来の新羅史の解釈に警鐘を鳴らしている。

本論文は、李恩碩氏自身が所属する国立文化財研究院がこれまでおこなってきた発掘調査・研究の成果を批判的に再検討して新たな解釈を試み、従来とは異なる新羅都城の復元をおこなっている点において高く評価できる。

## ２．課題と今後の展望

本論文は以上のような成果が認められながらも、いくつかの課題も残された。

まず、第 1 章では蘿井の性格について考察し、八角形建物について祭天儀礼をおこなった南郊であるとしているが、日本では八角形建物や天皇陵の八角形墳などがあり、東アジアにおける比較研究がさらに必要である。第 2 章では、金城の位置を隍城洞公園に比定しているが、未調査であり、今後の発掘調査が期待される。また、月城の築造時期や上部に造られた建物跡についても現在、発掘調査が進行中であり、それらの成果が明らかになった段階で、あらためて検討する必要があるだろう。第 3 章では、史料にみられる「龍の出現」という表現を「竜巻」という自然現象に結び付けて解釈している。現地で長く調査に携わった経験をもつ李恩碩氏ならではのとてもユニークな解釈であるが、龍については物質的には水との関連、思想的には道教や神仙思想との関連もあると思われるので、さらなる検証作業が必要である。また、皇龍寺にみられる三金堂のうち、東金堂を東輪太子のための礼拝施設であると解釈しているが、新羅における皇太子制はいつから施行されるのかという問題と合わせて考察する必要がある。また、皇太子制と関連して、3 人の女帝を出す新羅における母系制、父系制、双系制の問題についても検討する必要があるだろう。第 4 章では新羅都城の復元案が提示されているが、現在も王京の発掘調査がおこなわれており、今後も継続的な研究が必

要である。本論では仏教の聖地である慶州南山についての考察があまりなかったが、中国の神仙思想にみられる南山との関係や、紫宮と南山との関係についても検討すべきである。第6 章で取り上げられている新羅都城民の生活遺構についても、まだ発掘調査事例が少なく、今後の調査に期待する部分が大きい。

なお、李恩碩氏からは以下のような今後の展望が提示された。

①月城の建設時期、金城の位置、蘿井の信憑性、皇龍寺と芬皇寺の間にある竜宮の位置などに関するさらなる検討の必要性。

②正殿、朝元殿、臨海殿、崇礼殿、平議殿など王宮の具体的な建物配置の解明。

③8 世紀代以降に造成された寺院に関する研究。

④統一新羅時代の住居構造の解明。

⑤温石などを通じた中国大陸・韓半島・日本列島の交易についての研究。

## ３．口述試験

口述試験は、高久、田中、小林、早乙女の四委員によって実施された。主査の高久は総合的観点から、副査の田中は文献史学の観点から、同じく副査の小林は考古学的観点から、同じく副査の早乙女は朝鮮半島の考古学的観点から質疑応答をおこなった。各委員の総括的質問と個別的質問に対して、本論文提出者は明確に応答し、十分な対応がなされたと判断した。なお傍聴者は本学の大学院生と学部生を合わせて12名であった。

以上、学位請求論文ならびに口頭試問などを総合的に判断して、審査者四名は一致して、李恩碩氏に博士（歴史学）の学位を授与することを認める結論に達した。

以上

【要約】
本論文は、朝鮮三国時代の新羅における王宮や都市遺跡の位置問題・築造時期、寺院と王宮との関係性などを検討し、新たな視点から新羅王京の成立に対する解釈を提示したものである。また、都城民の生活と関連する遺構や遺物を検討し、当時の生活状況の復元をおこなっている。本論は以下の第 1 章から第 6 章から構成されている。
第1章では、新羅始祖の朴赫居世の生家であり、神宮跡と推定されている蘿井について、発掘調査で検出された遺構の年代と性格について再検討している。従来の見解では、1～6世紀の約500年間にわたって存在したとされているが、蘿井遺跡が井戸である根拠は存在せず、竪穴遺構が400～500年もの長期間にわたって存続した可能性は低いとした。さらに、現在の蘿井遺跡（八角形建物跡）は唐の制度を導入した7世紀中頃以降に祭天儀礼をおこなった南郊であったという新しい解釈を提示している。
第2章では、新羅初期の王宮である金城と南堂の位置、および正宮である月城の築造時期について、文献史料と考古学的な発掘調査成果を総合的に分析し、検討している。まず、金城については、北川北岸に位置する隍城洞遺跡で1～3世紀代の墳墓と大規模な製鉄遺跡が発見されていることから、ここが新羅初期の中心地であり、金城であると推定する。また南堂については月城に存在したと推定し、5世紀後半に月城が完全に整備された以後も、その内部に南堂が残っていたとする。月城の築造時期については、これまで4世紀から5世紀の長期間にわたって築城されたと解釈されていたが、放射性炭素年代測定によって5世紀前半と推定されることから、城壁は5世紀に築造され、6世紀に改修されたと解釈している。これまで不明確であった金城と南堂の位置についての解釈を提示するとともに、月城の築造時期を遡らせる従来の見解に対して問題点を提起した点が評価される。
第3章では、新羅都城の中心的な寺院である皇龍寺の築造過程と意義について検討し、新羅都城の都市計画について考察している。皇龍寺の造営については、文献史料には真興王が新宮を建設しようとしたが、黄龍が現れたため寺院に変更したと記されている。あらためて文献史料に記録されている「龍の出現」という表現を検討した結果、竜巻と関連性があり、竜巻によって龍と王を結び付け、竜巻が起こりやすい場所を予想して都市の中心となる新宮（紫宮）を計画したのではないかと解釈した。皇龍寺の位置は陰陽五行による王宮の配置とも正確に合致しており、新宮と新都市を建設するという真興王の意図を示しているとする。すなわち、真興王は、新宮（皇龍寺）の建設とともに、内部的には王権強化を、外部的には領土拡張を推進し、自らを転輪聖王と称して、王即仏時代を導いたと考察した。文献史料の解釈と発掘調査成果の再検討にもとづいて、真興王によって皇龍寺を中心とする都市計画が意図されていたことを明らかにした点が高く評価される。
第4章では、これまでの発掘調査成果にもとづき、新羅都城の段階的発展の様相について考察している。真興王は王権強化と正統性の樹立を目的として皇龍寺を中心とする都城が計画されたとする。すなわち、子午線に合わせた南北道路を中心線として配置し、皇龍寺の中央に連結するという基本設計が作られたとする。その背景には当時の洛陽城あるいは建康城の概念を導入した可能性を指摘している。従来、月城と城東洞殿廊跡をつなぐ南北の都市区画道路を朱雀大路であるとする説が有力視されていたが、これを明確に否定して、これまでの発掘調査によって検出された道路遺構に基づいて、都城における坊里制の

復元を試みている。その結果、新羅都城の都市計画の特徴は、唐の長安城や日本の平城京のような全体的な総合計画として進められたのではなく、中心地から拡大していった点にあるとする。新羅都城の復元案については、これまで多くの見解が提示されてきたが、これらの説を丹念に再検討するとともに、最新の考古学的成果に基づいて新たな復元案を提示している点がとくに注目される。

第5章では、王宮である月城の周囲に造営された東宮・北宮・南宮の位置比定について新たな視点からのアプローチを試みている。752年に東宮が設置され、760年に月城の西側に月淨橋が、東側に春陽橋（日精橋）が建設されたが、この春陽が東宮を意味する用語であることから、春陽橋一帯（現・国立慶州博物館付近）が東宮であったとする新たな見解を提示した。北宮については、芬皇寺東側の九黄洞苑池遺跡を北宮に比定し、苑池や氷庫を備えた王宮であったと推定している。南宮については、月城南側の仁旺洞寺跡一帯に南宮が造営されたと解釈した。各王宮の位置について、中国における宮殿配置、文献史料、考古資料を総合的に検討し、これまでとは大きく異なる新たな見解を提示している点が重要である。

第6章では、都城に造られた一般住居建築物や道路遺構などから、都城民の生活空間の様相について考察している。まず、都城民のうち、中下層民は7世紀以降も竪穴住居を使用し、貴族の住居空間は地上式構造であり、さらに願刹として寺院を造営していたことを明らかにした。新羅都城内の氷庫は、上流階層の祭祀と関連するだけでなく、生活水準を考える上でも重要である。6〜7世紀までは円形竪穴氷庫が使用されていたが、7世紀になると百済地域で長方形氷庫が造られるようになり、これが統一新羅時代の氷庫に影響を与えたとする。温石は温めた石を布などにくるんで懐に入れて身体を温めるものであり、日本においても奈良時代以降に滑石製のものが多く使用された。統一新羅時代の都市遺跡からも扁平で楕円形の滑石製遺物が多く出土しており、これまでは、正確な用途がわからなかったが、日本との比較によってこれらが温石であることを証明した。新羅の都城ではオンドルなどの暖房施設が発見されておらず、都城民にとって温石が重要な暖房道具であったと推定する。また、温石に用いられる滑石は統一新羅時代の滑石製品とともに唐からもたらされたものとし、船舶のバラストとして持ち込まれた交易品ではないかと推定している。これまであまり注目されてこなかった新羅都城民の生活について、百済・日本・唐との比較を通じて明らかにしている点が評価できる。

本論文は、李恩碩氏自身が所属する国立文化財研究院がこれまでおこなってきた発掘調査・研究の成果を批判的に再検討して新たな解釈を試み、従来とは異なる新羅都城の復元をおこなっている点において高く評価できる。

以上の結果から、審査者四名は一致して、李恩碩氏に博士（歴史学）の学位を授与することを認める結論に達した。